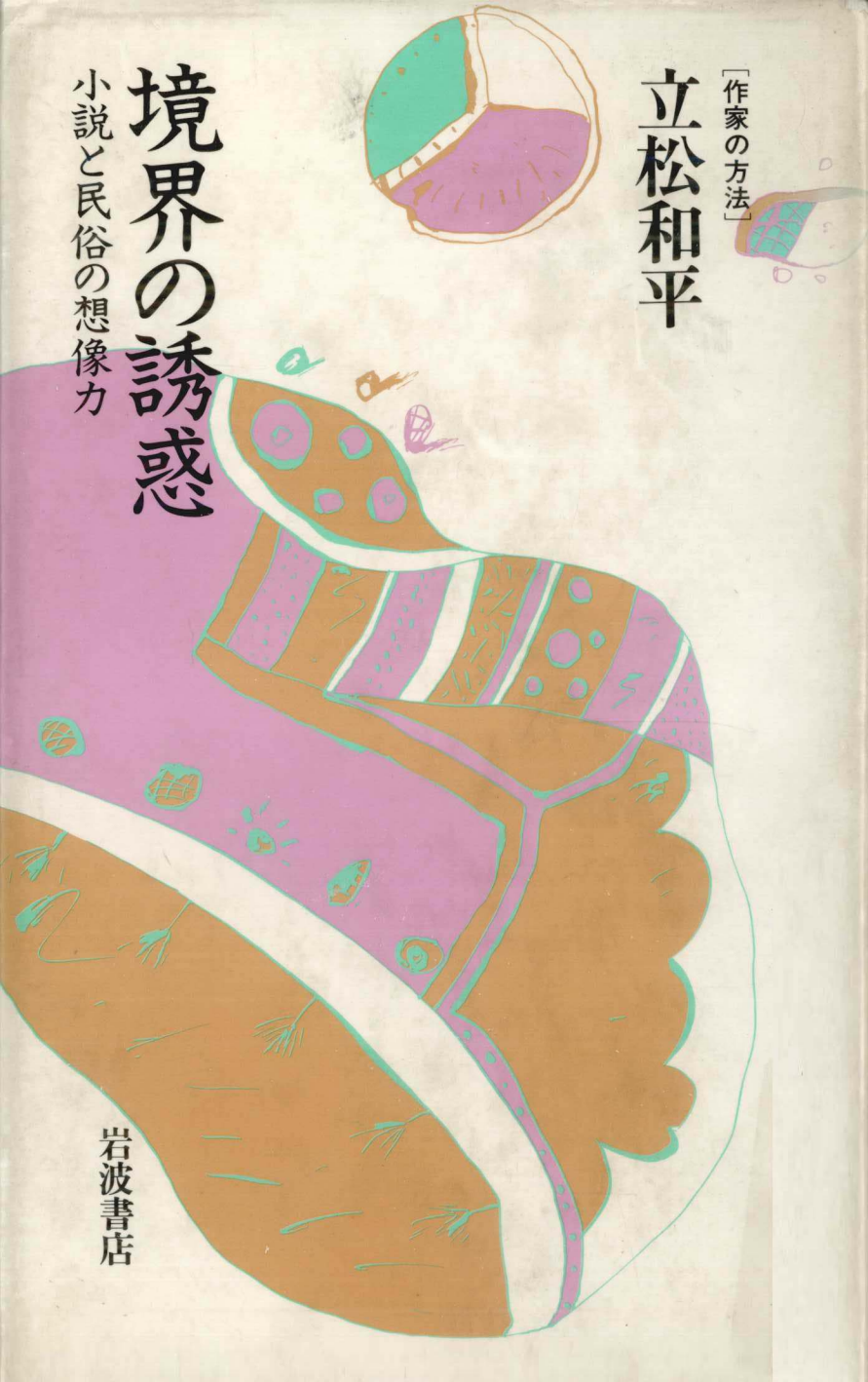


〔作家の方法〕

立松和平

境界の誘惑

小説と民俗の想像力



岩波書店

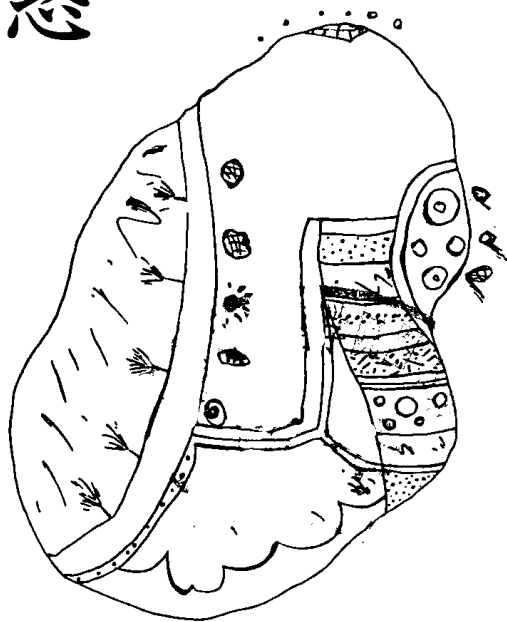
作家の方法

立松和平



境界の誘惑

小説と民俗の想像力



岩波書店

境界の誘惑

作家の方法

1987年12月15日 第1刷発行 ©

定価 1300 円

著 者 たて立 まつ松 わ和 へい平

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・法令印刷 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-003506-1

〈作家の方法〉
境界の誘惑

目
次

1 自然と人間 7

異人と他界 8

境界と禁忌 16

附喪神 21

自然と出会う 30

2 境界の想像力 35

漂泊と聖痕 36

境界の物語 44

七不思議 55

3 海上の道 65

風土の變への旅 66

ヤポネシア 76

海上他界 82

4 南島へ 99

旅のことぶれ 100

与那国の情け 103

まれびと 120

異常児 126

5 境界の共同幻想 137

くにうみ 138

現世の他界 148

6

うちなる境界 163

女になる 164

〈私〉の両義性 177

現代の境界 182

エピローグ 189

プロローグ——都市の境界

今朝、新聞を見ていましたらおもしろい記事が載ってました。この記事は明治四十二年頃の『遠野物語』が書かれた時代にほとんど書き替えることができます。しかも、『遠野物語』と違って、舞台は都市です。

いくつか新聞がありました。この毎日新聞が細部についていちばんよく書いてあったので、もってきました。ちょっと読んでみます。

亀有のアパート 中年男女の死

東京下町の民間アパートで、中年の男女二人が死んでいた。死後、約一カ月。部屋には、

ひとかけらの食べ物も残されていなかった。餓死。この飽食の時代、二人はなぜ、食べることをためらったのか。

四日午後零時十分ごろ、葛飾区亀有二の七一の八、アパート「第二泉荘」二〇八号室、無職、早川美千代さん（五五）方を家主の鵜殿市貞さん（八〇）が訪ねた。早川さんは二月から家賃（二万九千円）を払っていない。その催促だった。

トントンとドアをたたいたが、応答がない。不審に思って、合いかぎでドアを開けると、六畳間に敷いた二組の布団の上に、パジャマ姿の早川さんと、同居していた男性の死体。鵜殿さんは驚いて一一〇番した。

亀有署の調べでは、外傷はなかったが、遺体は極端にやせ細っていた。冷蔵庫を開けても食べ物全く見当たらない。台所のコメびつには一粒のコメもない。二人とも餓死だった。

早川さんの本籍地は江東区。「第二泉荘」には五十九年九月に入居。その前は墨田区内のアパートに住んでいたという。五十四年に葛飾区内の家政婦紹介所に登録、病院で付添婦

をしていた。このころ、一緒に死んだ男性と知り合い、同居を始めたらしい。前のアパートの隣室に住んでいた自営業、佐々木清美さん(四二)は「男の人は仕事をせず、家にいることが多かった。早川さんが生活費をまかなっていたようだ」という。

男の年齢は五十歳前後。早川さんは近所の人には「うちの主人」と呼んでいたが、本当の名前はだれも知らない。

昨年八月末まで早川さんは付添婦をしていたが、それ以降、働いた形跡はない。隣室の食品会社パートの女性(五七)は「今年に入って窓が開いたところを見たことがない。四月半ばごろから静かで、夜逃げでもしたのかと思っていた」と話す。

早川さんは昨年暮れ、千葉市に住む姉のところへ金の無心に行き、約十万円を受け取っている。しかし、その後も家賃は滞り、五月初めから電気、ガスも料金未払いで止められていた。

六畳間と三畳の台所の1K。六畳間にテレビ、整理ダンス、台所に冷蔵庫、茶ダンスなど。死を覚悟したように、部屋の中は整然としていた。

五月初め、鵜殿さんはやはり家賃の催促に早川さん方を訪れている。二人は布団の中に寝ていた。

「家賃はどうしたんですか」

起きようともせず、顔だけ鵜殿さんに向けた二人。

「何とかしますから、もう少し待ってほしい」

「食べていけないのなら、生活保護を受けたらどうですか。民生委員に話してあげるから、私に相談に来なさい」

二人は押し黙ったままだった。結局、相談には来なかった。自ら選んだような餓死への道。鵜殿さんにも二人の本心はわからない。

ようするに中年の男女が一カ月前から安アパートで死んでいた。その死因は餓死であったという。これが昨日、すなわち一九八七年六月四日に発見された事件です。

このことをどう見ていくか、追々『遠野物語』をとおして語っていきたいと思っています。

現実に日常の裂け目にこんな事件が頻発しています。

現代という時代は非常に明るくて、豊かで食べ物はいくらに溢れているというふうにいわれていますが、現実に東京のど真ん中で、アパートに中年男女が二人餓死していく。二人にまつわるいろいろな条件はあったと思います。ほかの人間ではわからない二人だけの事情があって、しかも生活保護を受けなさいと外から管理人がいつても、ほとんど反応を示さずにみずから死を選ぶようにして死んでいったのです。

この二人の住んでいた部屋とはどんな空間だったのか。われわれの日常から、たとえば、セミナー・ルームのこの場所とその二人のいたアパートはつながっています。しかし、同時にこの二人に対する想像力をはたらかすのは非常にむずかしいのです。

簡単にこの事件の説明はできる。二人はみずから死を選びとっていった。世の中にはいくらでもこの二人を救済する装置があります。生活保護がまずあります。しかしながらやっぱり現実に餓死していったということ、この事実が現代ではテレビのニュース番組で語られたり新聞に載ったりして、情報としての文章が流通していきます。

民俗的な社会、これほど情報化されていなかった時代にこれがどういうふうに語られていったらうかということに対する想像力は、またこちらの想像力を刺激してきます。

この事件をいま現在、ぼくたちは新聞記事で読んでしまいます。一瞬にして読み捨て消費してしまいます。しかし、この場所とそのアパートとがつながっているといいながら、その間にはいくつかの境界線があると考えるべきだと思うのです。

その境界線、都市のなかにおけるいくつにも張りめぐらされた境界線について語っていきたいと思います。これは結論めいたものですから、ひとまずこの新聞記事はおきます。

1

自然と人間

異人と他界

『遠野物語』は皆さんにも親しい本だと思います。たくさんある小さな話、百二十ぐらいありますが、どこから入ろうかなとぼくは迂回しながら、ジャブを放ちながら読んでました。

この『遠野物語』の書かれた状況をまず想像してみたいと思います。

『遠野物語』の舞台は、いま読んだ新聞記事とはちがって農村です。純粋な農村です。農村のなかの共同体と、共同体以外の世界との交通の物語であるというふうにまずいえると思います。そしてこのいろいろな種類の「交通」を持った物語がこの『遠野物語』のモチーフである。異人、それは山の神様であったり、妖怪の類であったり、また共同体内部の人間が他界に向かって旅をしていて異人になります。つまり日常生活の場のある共同体と、異人の住む他界と

の交通の物語としてこの本は読めると思います。

ともかく刺激的な書物で、しかも上梓は明治四十二年ですから、およそ八十年ぐらい前の出来事です。たった八十年前にこんな想像力の豊かな世界があったのです。

では、任意の一点というか、ぼくのいま開いたところ、「二八」を見てください。

二八 始めて早池峯に山路をつけたるは、附馬牛村の何某という獵師にて、時は遠野の南部家入部の後のことなり。その頃までは土地の者一人としてこの山には入りたる者なかりしと。この獵師半分ばかり道を開きて、山の半腹に仮小屋を作りておりしころ、或る日炉の上に餅をならべ焼きながら食いおりしに、小屋の外を通る者ありて頻に中を窺うさまなり。よく見れば、大なる坊主なり。やがて小屋の中に入り来たり、さも珍しげに餅の焼くるを見てありしが、ついにこらえ兼ねて手をさし延べて取りて食う。獵師も恐ろしければ自らもまた取りて与えしに、嬉しげになお食いたり。餅皆になりたれば帰りぬ。次の日もまた来るならんと思い、餅によく似たる白き石を二つ三つ、餅にまじえて炉の上に載せ置

きしに、焼けて火のようになれり。案のごとくその坊主きょうもきて、餅を取りて食うこと昨日のごとし。餅^つ尽きてのちその白石をも同じように口に入れたりしが、大いに驚きて小屋を飛び出し姿見えなれり。のちに谷底にてこの坊主の死してあるを見たりといえり。

この物語をどう読むか。この附馬牛村の何某という獵師は、早池峯に山路をはじめてつくつた人物だといえます。ようするに早池峯に向かって交通路を開いていった人物として書かれています。

いままで早池峯という一種の聖域、山の世界があった。そこに人間が入る道をつくっていったのです。つまり人工の空間をどんどん拡げていった最初の人物として何某という獵師がいます。彼が入るまでは「土地の者一人としてこの山には入りたる者なかりしと」、というわけなのです。しかし、彼はどんな理由があつてか、とにかく早池峯に道をつくりだした。つまり彼がしたことは山に人工的な空間を拡げていったのです。文化を山に刻んでいく役割をしていた人間です。